談話室

元気な仲間たち

三春町では，アメリカ・ウィスコンシン州の酪農地帯の小さい町ライスレイクと，16年余姉妹都市交流を続けています。生活様式やものの考え方の違いを実感できるホームステイ体験から，農業婦人はとくに強い刺激を受けて，その後も活発なグループ活動を続けています。会員数は50人余。

今回は，三春農民塾長先生をお招きして，研修懇談会を開こうということになりました。会場は，茅葺屋根のダム水没移転民家レストラン。参加する人は，恒例のとおり，思いおもいの手料理一品持ち寄り。卓に溢れんばかりの豪勢なご馳走を囲んで，お酒は飲み放題。話題とスタミナが切れるまで時間も無制限。

「たまには，俺たちも参加させてくれ」と旦那衆から申し入れがあって，今回は夫婦同伴懇談会ということになりました。

旦那の手料理ご披露などもあって，まずは和気藹々のうちに，腹拵えと適度のアルコール。

一段落したところで，塾長先生の熱弁がたっぷり１時間。

農業は21世紀の花形産業であること。

農業は第６次（１＋２＋３）産業として総合化すべきこと。

適地適策（てきさく）を旨とすべきこと。

農業者は知的総合力の持ち主であるべきこと。

集落ごとの農業法人化が総合力発揮の近道であること。

毎度のことながら，先生の情熱には圧倒されてしまいます。しかし，議論に火が付いてからの盛り上がりが，楽しいのです。その模様を，多少の脚色を加えながら，ご紹介しましょう。

先生「どうだ，このなかには，将来女性社長になれるひとはいないか。」

Ａ君「先生，将来ではなく，現に俺の女房はおんな社長です。」

先生「それでは，お前はなんだ。専務さんか？」

Ａ君「いや，まだ平社員です。兼業先の会社のリストラにあっちゃって，農業に戻っ

てみたら，女房の指示に従って働くだけの，昔で言えば作男。」

先生「奥さんとのあいだで家族協定結んでいるか？ それとも，重役昇格をねらっているのか。」

Ｂ君「俺の経験では，女房の尻に敷かれるのから抜け出すのは難しいぞ。」

Ａ夫人「先生が，おんな社長なんて話を持ち出されるから，こんなことになっちまうのよ。ライスレイクでホームステイした酪農家でも，野良の力仕事は旦那様，経営管理や家事・育児は奥様と，役割分担がはっきりしていましたよ。それが男女共同参画でしょ。」

Ｂ夫人「そうよね。適地適策も大事でしょうが，適材適所も強調してくださいよ，先生。」

先生「そうだね。集落農業法人を成功させる秘訣も，適材適所が実現できるかどうかだ。うまくいけば，大きな総合力を発揮できることになるし，その逆の場合は悲劇だ。」

Ｃ君「Ａ君だって，パソコン操作には熟達しているし，リストラされた会社勤めの経験を生かせば，いままでの農業者には欠けていた農業法人の経営管理能力を大いに発揮してもらえると，期待しているよ。」

Ａ君「本社に行けば重役様，分社の我が家に帰れば平社員か。」

Ｃ夫人「男の人は，肩書きの話になると，すぐ熱くなるのね。それよりも，先生が言われる第６次産業ですが，ここの三春の里振興公社は，まさにそれではないでしょうか。農場部もあります。産地直売所もあります。地場農産物を食材としたレストランも加工施設もあります。」

先生「そうだよね。世の中不況の真っ只中だし，赤字経営の３セクが多いのだけれど，公社の運営状況はどうかね。」

Ｄ夫人「私も産地直売所の登録農業者ですが，全体として前年比50％増。転作大豆の味噌・豆腐，転作小麦のうどんなど，みな好評です。」

先生「みなさんは21世紀の花形産業を先取りしているというわけだ。」

（福島県前三春町長　伊藤　寛・いとうひろし**）**